

# ◆川原寺の調査—第91-7次

## 1 はじめに

本調査は、川原寺史跡指定地内における、電力・水道の共同溝敷設工事に伴う事前調査である。調査地は川原寺南側の県道多武峯・見瀬線で、工事の総延長は250mであるが、史跡指定地の西半にかかる約200mについて調査した。共同溝の埋設については、工事にあたって立会調査とし、堅坑設置箇所については、新たに掘削をうけるため発掘調査を実施した。

共同溝埋設部分については、既存の水道管理設時に、路面下1.6mまで掘削を受けており、地山まで達していた。

遺構は検出できず、遺物も出土しなかった。

当初計画の堅坑位置は、川原寺南面大垣北雨落溝の想定線上で、南門から西へ83mに位置する。南北3m、東西4mの調査区（東区）を設定して調査を行ったところ、後述するように石列と瓦敷きからなる、川原寺関連と考えられる遺構が検出されたため、堅坑の設置を中止し、遺構を現状保存することとなった。協議の上、代替地として南西へ3m移動した地点に南北3m、東西4mの調査区（西区）を設定して調査を行った。調査期間は東区が1998年7月1日～3日、西区が同9日～10日、共同溝敷設工事立会は7月2日～29日まで行った。

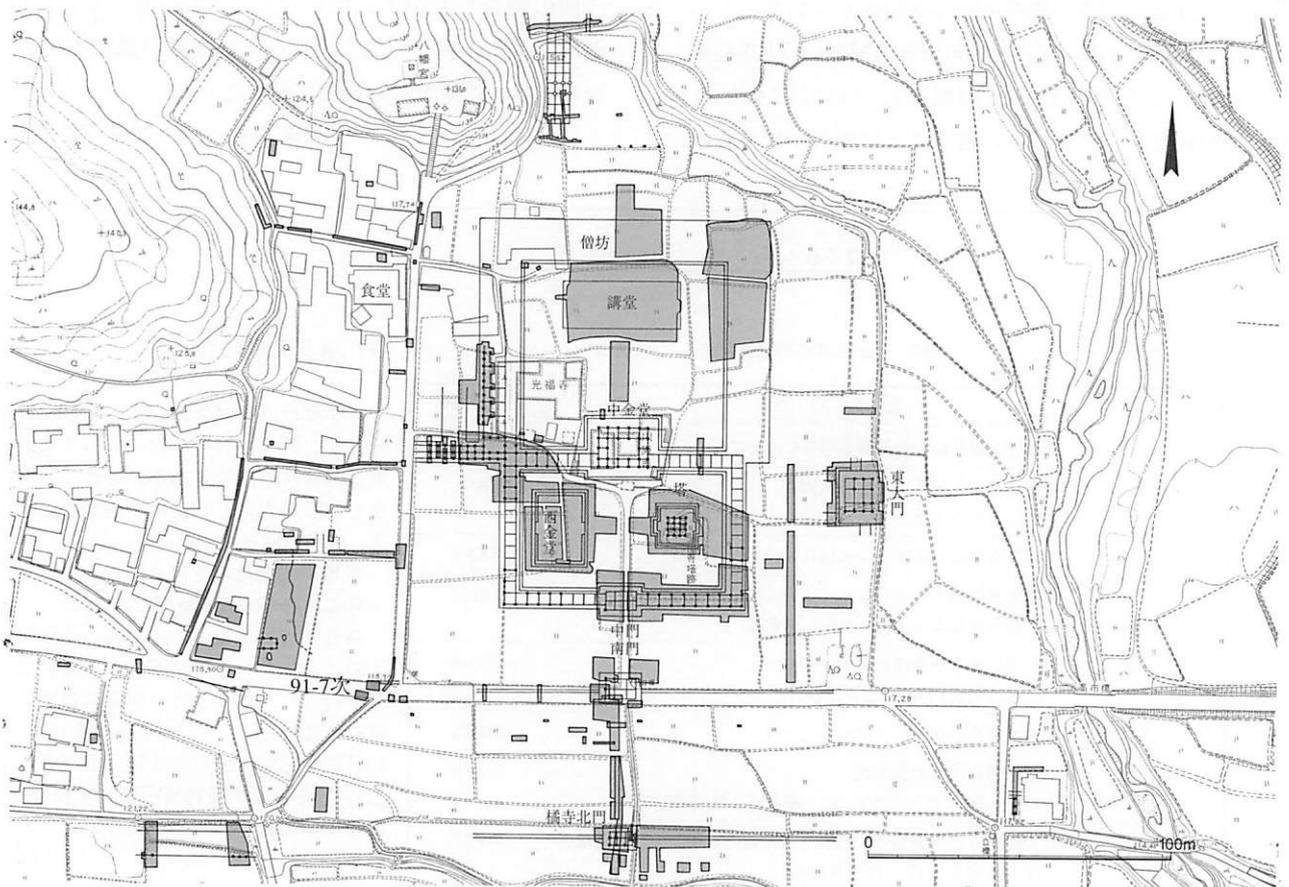


図68 第91-7次調査位置図 1:2500

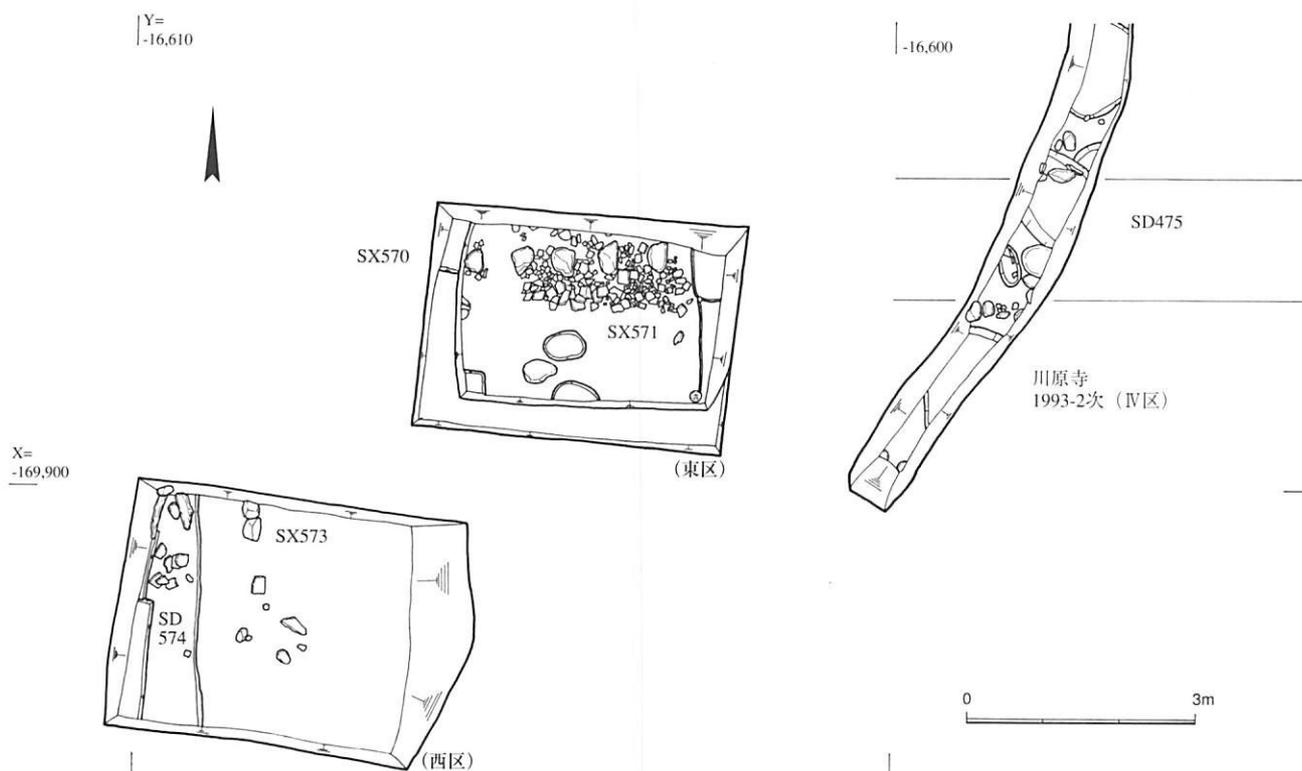


図69 第91-7次調査遺構図 1:100

## 2 基本層序

アスファルト舗装、道路盛土の下は、旧水田耕土、茶灰色砂質土と暗灰色粘質土（遺物包含層）で、これを除去した青灰色砂質土上面で遺構検出を行った。遺構面高は、東区がH=117.0m、西区が116.9mである。東区、西区ともに遺物包含層中には中世のものと見られる暗渠があり、多量の瓦が詰められていた。

## 3 検出遺構

**SX570** 東区北寄りで検出した東西方向の石列。50～70cm間隔で5石が並ぶ。石は長径30～40cmで、長径方向を南北に揃えて、上面を平坦に据える。据付掘形を覆うように瓦敷SX571がある。1993-2次調査IV区で検出した南面大垣北雨落溝SD475の延長上にあたる。SD475は南側石の残存高がH=117.4m、北側石が117.2m、溝底が117.1mで、SX570の上面117.0mは、SD475の底に近い。

**SX571** 石列SX570の周囲に敷き詰められた瓦敷き。北側はトレンチ北方へ30cm以上続くが、南側はSX570の南約40cmまで広がって止まる。

**SX573** 西区北端西寄りで検出した南北方向の石列。長径20～30cmで、2石を検出し、トレンチ北に1石が続くことを確認した。

**SD574** 西区西端の南北方向の素掘溝。東肩は石列SX573の西60cmにあり、西に向かって落ち込んでおり、西肩はトレンチの西方にあって規模は不明。

## 4 出土遺物

土器は小片が数点出土しただけである。瓦は包含層中、特に中世の暗渠から多く出土した。丸瓦506点、76.3kg、平瓦1,329点、198.8kgである。軒丸瓦は601A型式2点、601B型式1点、601C型式1点、軒平瓦は751型式1点、重弧1点、651B型式3点、651D型式3点、651型式2点が出土した。なお、東区の瓦敷SX571の瓦は取り上げずに埋め戻した。そのほか方形三尊塚仏1点が出土している。

## 5 まとめ

今回の調査で検出した遺構のうち、東区の石列SX570と瓦敷SX571について考察しておく。この延長上の東3.5mの位置に1993-2次調査IV区があって、ここでは石組溝SD475を検出し、川原寺南面大垣の北雨落溝と推定している（『藤原概報25』102～106頁）。この石組溝は両側に花崗岩川原石を立てており、幅は側石内法で約1.5mある。石列SX570を東へ延長すると、石組溝の中心やや南寄りにあたり、瓦敷SX571の南端は、石組溝南側石よりも南に広がるようである。調査範囲の制約から、SX570とSX571の性格は明らかにできていないが、SD475からわずかな距離を隔てただけで、様相が異なっている。両調査区の間でSD475が北側に折れる可能性をも考慮すべきなのであろうか。今後の周辺の調査成果に期待したい。

（鈴木恵介）

◆飛鳥地域の再開発直前の土器

1990年、雷丘の東方150mで、東西幅110mを越える沼状地形とそれを石組暗渠を設置しながら埋め立てた大規模な整地の跡が発見された(山田道第2・3次調査『藤原概報21』1991)。

近年、奈良時代の小治田宮の発見を承け、推古朝の小墾田宮をも雷丘周辺に推定する説が提起され、この整地はその重要な根拠とされている。

図70の1～21は整地の西端、南北に整形された地山に沿って堆積した、整地以前の土層-黒褐色土層出土の土器である。土器は少量ではあるが、それでも飛鳥寺の造営が始まった588年以前に限定できる「飛鳥寺下層」資料が、『飛鳥寺発掘調査報告』(1958)所載の須恵器杯Hと蓋各1点の実測図であることからすれば、質量ともにそれを補うにたる内容をもつ。

「飛鳥寺下層」発見後、40数年を経て、豊浦寺下層、飛鳥寺西回廊基壇、飛鳥寺南方石敷広場下層など、遺跡変

遷の理解と出土状況から年代を推定できる資料も、それぞれ数点ずつながら増えてきた。併せて飛鳥地域の再開発時の姿を探る手だてとしたい。

黒褐色土層の土器には、土師器杯G、杯H、甕、鍋、須恵器杯H、甕、壺等がある。しかし「飛鳥I」を特徴づける金属器模倣の器種-土師器杯Cや須恵器杯G・杯Bは1片もない。その点で整地土の土器との違いは明確である。

土師器杯G(9～14)には多様な口縁端部のものがあり、土師器杯H(15・16)は底部のケズリが狭く、口縁部との間に鋭い稜が付かない。これらは古相の飛鳥Iに受け継がれる。土師器甕(17～21)は、旧小墾田宮推定地SD50最下層資料に似た直立気味の口縁部をもっている。

須恵器杯H(1～8)は立ち上がりの形状は多様ながら口径(蓋あるいは身の蓋があたる部分の直径)14cm前後で底部ヘラケズリが大半を占める。口径14.5cm前後の飛鳥寺下層(22・23：1983年再測)より新相を示す。

この時期、須恵器杯は口径、立ち上がりの縮小とヘラケズリの省略の方向に変化する。口径12.5cmの24、25は小さな立ち上がりで底部ヘラケズリ。それぞれ飛鳥寺の西回廊基壇、南石敷広場下層から出土した(『藤原概報13・15』)。飛鳥寺回廊の完成は592年。形態手法の上でも飛鳥Iに共通点が多い。豊浦寺講堂下層の掘立柱建物以前の土層から出土した須恵器杯H(27)は口径14cmで底部ナデ調整。建物が豊浦宮と関わるならば、西暦593年以前。土師器杯C(28)は建物廃絶後で講堂以前の土器。須恵器壺(26)、土師器杯H(29)も講堂以前(『藤原概報16』)。

ともに592、593年以前と推定される飛鳥寺西回廊の須恵器杯H(25)と、豊浦寺下層の27との違いは明確である。どちらがどれだけ、その年代に近いのか。そして、その向こうに「黒褐色土層」の土器、「飛鳥寺下層」がある。上層・埋土資料が「飛鳥I」の標式資料となっている旧小墾田宮推定地SD50の評価を含めて検討を続けたい。(西口壽生)

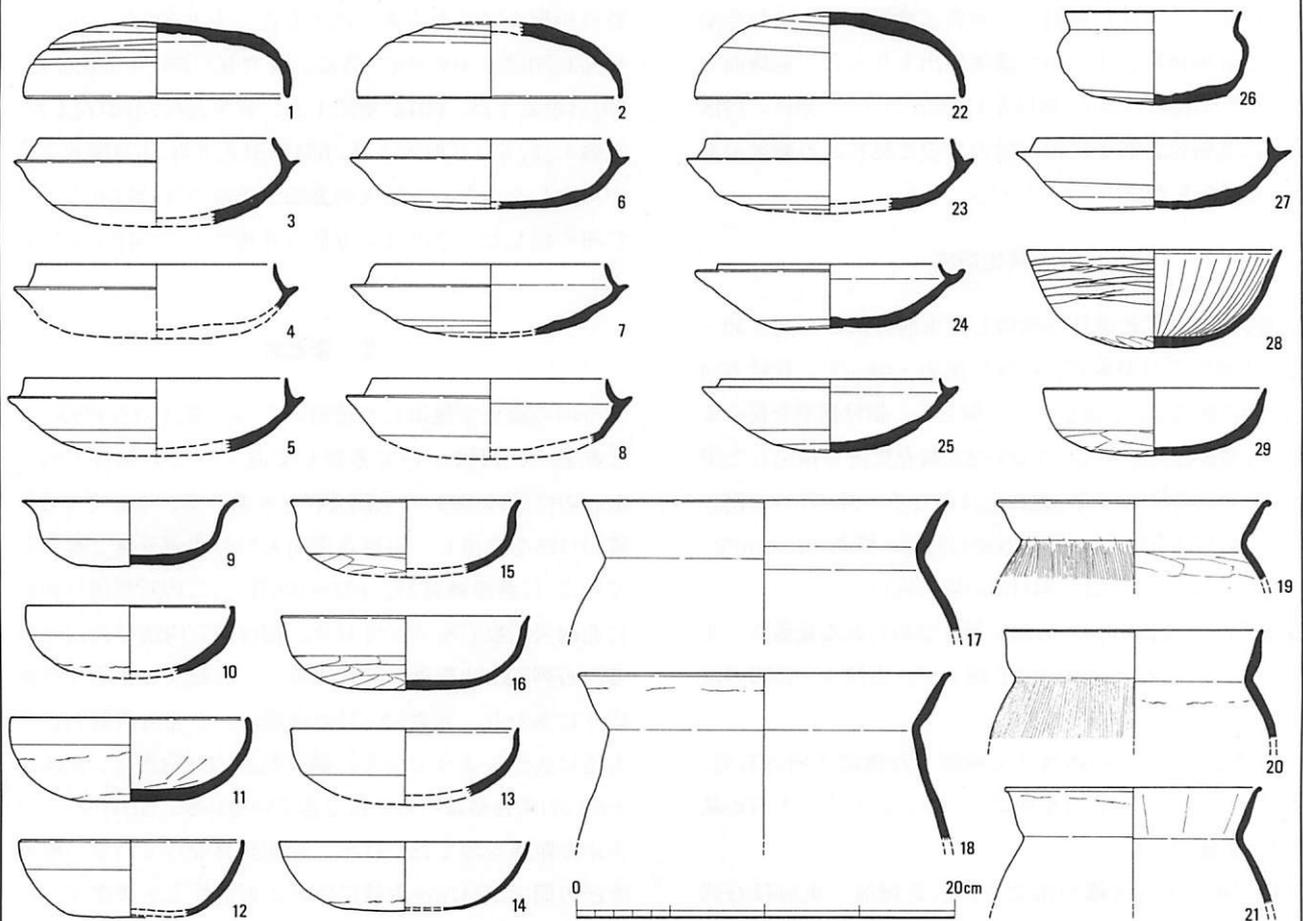


図70 山田道第3次調査出土土器(付 飛鳥寺下層・豊浦寺下層) 1:4